

# 平成28年度 スーパーバイザーによる学校教育支援事業報告書

## 研究テーマ 『アクティブ・ラーニングの視点に立った授業づくりによる学力向上』

米子市立弓ヶ浜中学校

スーパーバイザー 岡山大学大学院教育学研究科 佐藤 暁 教授

### 1 はじめに

米子市立弓ヶ浜中学校…昨年度まで、第40回米子市中学校区人権教育研究発表会に向けて研究していた。良くも悪くも素直な生徒が多く、ここ1、2年は大きな生徒指導もなく落ち着いて授業が受けられている。

### 2 研究主題と設定理由

語り合い、学び合い、支え合いながら仲間とともに高め合う生徒の育成

～生徒一人一人が主体的に取り組み、協働的に高め合う授業づくり～

ここ2年、自尊感情を高めることや他と関わる力を身につけるべく研究を行い、実感としても客観的なデータとしてもそれらの力が高まってきたが、さまざまな要因が影響する自尊感情については、十分に高まったとは言いきれない。その背景には、学力が十分に身につけていないことも原因として挙げられる。

本校生徒は学力の二極化の傾向が強く、低学力の生徒の人数が多い。そのことが、学習や進路実現に向けての意識の低さ、転じて自尊感情の低さにも結びついていると考えられる。

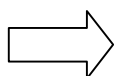
以上のことから、本校では、広がりつつある学力の二極化に歯止めをかけ、だれもが参加できる「**楽しい授業**」「**分かる授業**」の推進を行う必要がある。ここで言う「楽しい」とは、自分の好きなように振る舞えるという私的な楽しさではなく、仲間と高め合い伸ばし合うことが実感できる「**楽しさ**」であり、同時にその教科の特性に応じて**深く考え、理解する**という「**楽しさ**」である。表層的な「**やっつけて楽しい**」も大切だが、それだけで終わらない展開の工夫を探究する（「**活動あって学びなし**」にならない）。生徒自らが課題に気づき、**主体的に考え**実行できる授業づくりが、参加度の高い、生きて働く学力を形作るものとする。さらに、**話し合い、考えを共有することで高め合い、深い学び**を実感できることも重要である。これまでの研究のよい部分を継承しつつ、教師と生徒が一体となって学びを追求していける授業づくりをめざす。→アクティブ・ラーニングの3要素と合致しており、これを核に研究を行うことを全職員で確認した。

### 3 具体的な取組

#### (1) 実態把握

全校生徒に、次のような項目で教科ごとにアンケートを行い、生徒がどう感じているのか調査した。

- ①授業が楽しい
- ②授業が分かりやすい
- ③授業にめあてが提示されている
- ④授業に話し合う活動が位置づけられている
- ⑤授業に学習を振り返る場面が設定されている



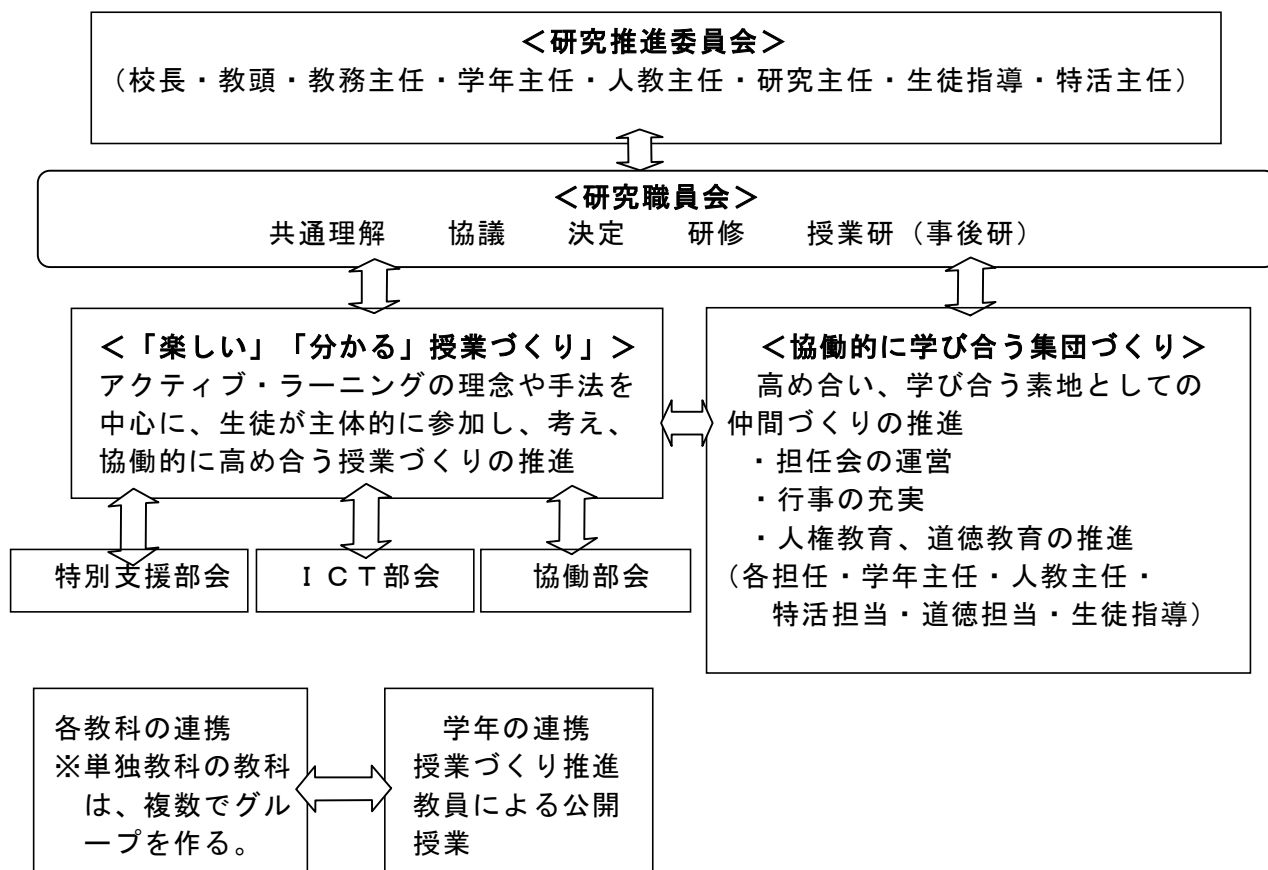
②～③の項目で特にばらつきが見られ、共通した取組が必要であると結論づけた。

#### (2) 組織編成

アンケートの結果を踏まえ、アクティブ・ラーニングの視点に合致した3部会を組織。職員が部会に分かれ、それぞれの視点を中心に授業研究を展開した。

- ①特別支援部会 …特別支援の視点に立ち、すべての生徒にとって学習に取り組みやすい環境、発問、学習活動の工夫を目指す
- ②ICT部会 …… ICTを積極的に使い、課題提示の工夫、発表の補助、学習のまとめなど、場面に応じた効果的な活用を目指す
- ③協働部会 …… 話し合ったり、一緒に活動したりすることで、学習に広がりや深まりが生まれる活動の工夫を目指す

組織図



(3) 外部講師の招聘

外部から客観的に本校の取組を評価し、助言を頂くべく、2人の先生を招聘した。

○岡山大学教育学研究科 教授 佐藤 暁 先生 (スーパーバイザー)



→ 12月に普段の授業の様子を、1月に授業研究会に御参加頂き、指導・助言を頂いた

○米子市教育委員会学校教育課 主幹兼指導主事 西村 健吾先生



→ 全授業研究会に御参加頂き、指導・助言を頂いた

(4) 研究の実際

①年間予定

年に3回の研究週間で授業公開。前後で研究部会・教科会を設け、指導案の検討や授業の事後研究会を行った。

月	行事等	授業研究会	諸会議	準備等
4	入学式 修学旅行(3年) 宿泊研修(1年)		研推委 研職①② 学年会 研究部会	全体計画 研究組織 研究内容の具体化 授業アンケート・集計
5	中間テスト		研推委 研職③ 学年会 研究部会	経営案 年間指導計画 Q-U
6	西部地区総体 期末テスト	研究週間 校内授業研究会	教科会 研職④	指導案 授業アンケート・集計
7	職場体験(2年) 期末懇談		研推委 研職⑤ 学年会	心のアンケート
8			研職⑥ 研究部会	
9	体育祭 生徒会役員選挙		研推委 研職⑦	
10	西部地区新人戦 中間テスト	研究週間 校内授業研究会	学年会 教科会	
11	文化祭 期末テスト		研推委 研究部会 研職⑧	指導案 Q-U 心のアンケート
12	期末懇談		学年会 研職⑨	学校評価アンケート 授業アンケート・集計
1	進路懇談(3年)	研究週間 校内授業研究会	研推委 研究部会	
2	新入生説明会 期末テスト	研究週間	研推委 研職⑩ 教科会	研究のまとめ
3	卒業式 期末懇談		研推委 研職⑪ 研究部会	来年度にむけて

②各学期の研究授業

○一学期

※ ( ) 内は部会研究会及び全体研究会の授業

・特別支援部会(3年生・英語 「道案内②」)

☆手順の明示、ルーティーン的确立、視覚支援の充実

・ICT部会(3年生・理科 「酸・アルカリと塩」)

☆タブレット端末の効果的な活用(演示実験、発表時のワークシートを撮影→投影)

・協働部会(1年生・国語 「新しい視点へ」)

☆知識構成型ジグソー法による話し合い活動



・指導助言（西村健吾先生）



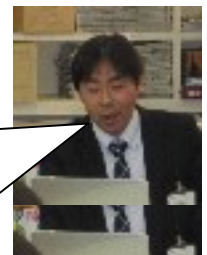
- アクティブ・ラーニングを軸に立てた3部会は、それぞれが今求められている学力の方向性と合致している。
- ある程度流れている授業を、深い学びに落とし込むための教材研究が一層必要。そのための特別支援の視点、ICTの利用、協働的な活動でありたい。（主体的、協働的が取り沙汰されて、深い学びがなおざりになっていないか）
- 全ての教員が、どの教科でも共通してこの取り組みを行っていくことが重要。
- 生徒と教師のつながりが見られ、よい雰囲気での授業が進んでいる。今が授業改革のチャンス。

○二学期



- ・特別支援部会（1年生・家庭科 「食品の選び方を考えよう」）  
☆実物の準備（手作りおにぎり、市販のおにぎり）、発問などの工夫
- ・ICT部会（1年生・数学 「変化と対応」）  
☆アニメーションの活用（変化の様子をTVに映し出し、可視化）
- ・協働部会（2年生・保健体育 「傷の手当て」）  
☆班による傷の手当てのプレゼンテーション（実物を用い、班ごとに違う課題を説明）

・指導助言（西村健吾先生）



- 3部会の内容がスパイラルで絡みつつある。それを意識した授業づくりを。
- 考える価値がある課題設定を心がけること。
- 互恵的な集団で話し合う視点を持つこと。そうなっている授業と、そうでない授業が見られた。
- ICTを使っただけの一斉講義型の授業をよく見かける。また、課題提示のみに特化した竜頭蛇尾な使い方も。そうでなく、学びを深めるためのツールとして使用する取り組みを。
- タイムマネジメントが重要。どこで学びが深まるのかの見極めを。
- 机間指導、小集団の学びの時に教師が何をするのか。生徒やグループの様子を見取り、適切な支援を行いたい。

○二学期末

- ・佐藤暁先生にお越し頂き、普段の授業を見て頂き、問題点やポイントをご指摘頂いた。



授業に入り込み、ビデオを回し、いやな思いをされた先生もあるかもしれない。こうして授業を見て回り、自分は生徒の姿を見ている。生徒がどの声かけでどのように活動していたかを見ている。今回は見た時間が短いので、自分の指摘がすべてではないが、生徒の姿がすべてなので、そう思って（自分の話を）聞いてほしい。

## ★生徒の何を見るか

- ・先生方の授業は工夫がなされている。授業をどう流すかではなく、それに対して生徒がどうだったかを見てほしい。学びに入りきれていない生徒、頼杖をつく生徒、邪魔はしないが参加できていない生徒、一見活発に見えるが自分の意見を言うことで周りを圧倒する生徒などがある。生徒の学びに向かう様子をもっと観察し、臨機応変に対応する、生徒同士の関わりを仕組むことで参加度を高める工夫が必要だと感じた。

## ★環境を整備する

- ・生徒が学びに向かう環境をもっと整備すべき。教室の掲示物（特別支援学級の掲示はすばらしい）、廊下やロッカーの整頓、机の状態、教師の声、生徒の声などすべてが環境。生徒が学びに没頭しているときにかける教師の声は、邪魔になることがある。

## ★自然に関われる人間関係を作る

- ・生徒同士がもっと自然に関われると良い。しかもそれは、異性の関わりがよい。男子同士はあてにならない。女子が男子の面倒を見るくらいのつもりで関わらせる。
- ・生徒に初めから主体性を求めるべきではない。生徒は疲れている。（脳疲労）生徒の主体性を引き出す授業づくり、関わりづくりを。

## ★授業技術の向上を

- ・先生の授業のスキルアップを。特に若い先生は、ベテランの先生から学ぶとよい。授業の流れが、生徒の活動→共有→個人にすると、学びに没頭する。自然なつぶやきが生まれる。もっと個人で解きたい、という気持ちになる。ICTを使っても、それを使って説明しているだけであれば、生徒は学びに没頭しない。二つのことを生徒は同時にできない。見るなら見る、作業するならする、聞くなら聞く、作業は分けて行わせなければならない。教師がしゃべりすぎてはならない。教師がしゃべっている間、生徒を見取ることはできない。

## ★「学び」と「育ち」

- ・「学び」と「育ち」を大切に。「学び」は、その時間生徒が没頭し、取り組んだこと、身につけたこと。「育ち」は、その積み重ねの中で習慣としてできるようになったこと。両方を見取り、授業に生かす。

## ★脳疲労

- ・人は、連続して脳を働かせ続けることはできない。単純に脳が休む時間が必要。しかし、現代の子どもは、部活、習い事、スマートフォン、ゲーム、テレビなど、常に脳が活動している。脳が休まるはずがない。2時間勉強しても、2時間スマートフォンをいじれば、まったく勉強していない生徒よりも学習成果は落ちる。生徒の脳を疲れさせないために、スマートフォンを使わせるべきではない。

## ○三学期

- ・特別支援部会（3年生・国語 「知られざる京都をプレゼンしよう」）  
☆生徒が調べた京都についての情報を、フリップや実物投影機でプレゼン
- ・ICT部会（1年生・保健体育 「バスケットボール」）  
☆シュートフォームをビデオで撮影。それを見ながら、改善点を述べ合う
- ・協働部会（2年生・社会 「新しい価値観のもとで」）  
☆明治政府の政策についてダイヤモンドランキングで評価→ワールドカフェで共有



・指導助言（西村健吾先生）

※社会、保健体育を参観



- 特別支援の視点、協働の視点、ICTの視点が全て盛り込まれていた実践。
- タイムマネジメントをシビアに行う。生徒自身が活動を習慣化する。両輪で行うとよい。
- 課題設定がよい。「答えのない課題」であり、「複数で交流することでこそ価値を持つ課題」
- 対話の目的、視点を明確化すること。
- 学びの「三日月部分」だけでなく、残りの「十二日月部分」にも視点を持つことが大切。
- 学習して学び得たことが効果的に実践できる場の設定を。体育では特に必要。

・指導助言（佐藤暁先生）

※国語を参観



- 教科の本質、文言の意味をよく考えるべき。\_
- うまく活動できていない生徒に焦点をあてること。大勢が取り組んでいても、一人取り組めていなければ、そこに手立てを考える余地が生まれる。どこでつまづいているかを見取ること
- 学びに切実感があるか。そう感じる課題設定を。
- 生徒がお互いを大切にする雰囲気作りを。そのための環境の徹底を。
- 生徒が主語になる授業、生徒が主語となる研究を。

## 4 成果と課題

### （1）生徒のアンケート

#### ○1年生

- ・1学期より学習内容が難解になったため、1学期からの数値の上昇は見られなかった。
- ・それでも、全体的には高い数値を保っており、意欲的に学習に取り組んでいることが分かった

#### ○2年生

- ・10教科中9教科で数値の上昇が見られた。特に、「目標が提示されている」「話し合い活動が組み込まれている」などの項目で顕著であった。
- ・とはいえ、数値の値は3学年の中では低く、さらなる「分かる」「楽しい」授業の創出が必要であることが分かった。

#### ○3年生

- ・全ての教科で数値の上昇が見られた。特に、「目標が提示されている」「振り返りが行われている」などの項目で顕著であった。
- ・ただし、基礎学力が十分に備わっておらず、せつかく考え方や話し合いは深まっても、解決するための手段でつまづいてしまうという実態が見られた。

## (2) 教師の意見

- 3つの視点で研究を行った結果、それぞれが有機的に結びつき、より質の高い学習につながった。
- 研究の視点が明確になり、「なにに取り組むか」ということがはっきりした。
- さまざまな教師の授業をお互いに見合うことで、自身の実践に取り入れたり、アドバイスをすることができた。
- 新たな手法を取り入れる機会にもなり、授業の幅が広がった。



- △授業の具体的な方法を設定したわけではないので、意識や教科で差があり、全体で共通した実践になりきっていない。
- △いまだ教師によって授業の質に差があり、そこを埋めていくための手立てが必要。
- △ICTは器具や環境が整わなければどうしても積極的に取り組め切れない。
- △学力を確実に上げるための方策としてはどうなのか。基礎基本の定着のための取り組みも必要ではないか。
- △教師目線で進む授業を、いかに生徒を主語にしたものに変えていくか。そのためにどのような取り組みが有効かを考える必要がある。

## 5 おわりに

「生徒を主語に」という言葉が、われわれ教師の視点から抜け落ちていることが、今回の研究の取り組みで浮き彫りとなった。それは、とりもなおさず『評価』の視点である。『評価』と聞くと、我々はとかく『総括的評価』にばかり目を向けがちだが、まず生徒がどのようなレディネスを持っているのかを判断する必要がある(『診断的評価』)。また、発問に対して、あるいは活動のなかで、生徒がどう考え、どの地点にいるのか、何につまずき、どこに向かうべきなのかを見取り(『形成的評価』)、そこに対して支援や声かけが行われなければならない。その視点こそ、「生徒を主語に」することに他ならないのではないかと実感した。

教師の教材研究の技術は育ち、手法の幅も広がりつつある。その中で、「授業を流すこと」ではなく、「生徒を主語に」「生徒が何を学び得たのか」がはっきりするような実践をしていく必要がある。

それを実現することが生徒に確かな学力を身につけさせるものとする。そのために全職員でどのような取り組みが仕組めるかが、今後の大きな課題である。